

# 水—利用の論理・技術の倫理

東京大学教授 鬼頭 秀一

私は環境倫理をやっておりますが、環境倫理と言いますと、倫理学や哲学など「本の世界」というイメージを持たれるかもしれませんが、私の場合は比較的颜色なところに出かけて行って、現場で論理を組み立てるような研究をしています。今日は「水—利用の論理・技術の論理」というテーマで、私たちが川や水辺の空間とどう関わるかという問題と、技術の倫理の話させていただきます。

私たちが今まで水を利用したり、色々な形の技術を発達させてきました。現在では例えば大きなダムや構造物をつくって治水を行う大きな技術もありますし、里川は農業用水であったり、色々な水を引いて使う用水路であるという話がありましたが、人間が水を利用したりするための技術もあります。水は人間にとって必要なものですので、それを利用したり、関わったりしてきた技術というものを、どのように考えていくかが非常に重要だと思います。そういう意味で、技術のあり方は、私たちが考えている環境倫理の考え方になると思います。

## 人間と自然の関係の位相

人間と自然との関係を、少し理論的なところからお話していきます。人間にとって自然との関わりを考えたとき、そのひとつとして水の利用が挙げられます。しかし人間の営みはただ利用するだけに留まらず、広い意味で私たちが利用していることが非常に重要な部分となります。

民俗学において「マイナー・サブシステム」と言葉が使われますが、私はカタカナ言葉は良くないと思ひまして「遊び仕事」と言っています。この

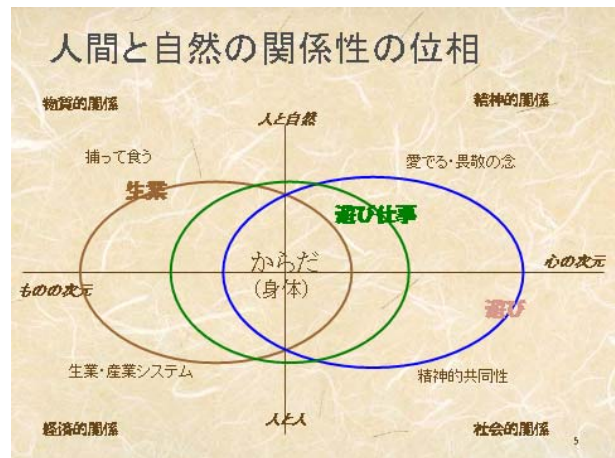
「遊び仕事」と、子どもを中心とした「遊び」という概念が話の中心になります。私たちが自然と関わっていく時には、利用して使ったりするのですが、その対極的なものとして遊び空間が非常に重要だと思います。そしてその中間的なものとして「遊び仕事」というものが出てきます。簡単に言えば、例えば川でうなぎを取ったりすることです。定義的に言いますと、これは副次的な生業ということで、経済的にはあまり意味が無い。ですから、今であれば川でうなぎが取れば天然ものとしてかなり高く売れるでしょうし、山菜でも今では市場に売ってしまう人もいますが、昔は普通の農家の方がそういった形で売るなんてことはなかった。このように経済的には副次的な意味しかなくても、脈々と受け継がれている。山菜を取るにしてもきのこを取るにしても、好きな人は山に行行って取る。川では子どもにしろある程度の大人にしろ、うなぎを捕ったりしますが、そういうものが脈々と受け継がれていく。ですから無くなったとしても実は経済的な影響が無い。収入源になっているわけではありませぬので、当事者の人に非常に情熱を持って伝承されてき

### 【遊び仕事】 (マイナー・サブシステム)

- 副次的生業
  - ・ 「経済」的には、副次的な意味しかない
- しかし、
  - ・ それでもなおかつ脈々と受け継がれてきている
- 消滅しても、たいした経済的影響を及ぼさないにもかかわらず、
  - ・ 当事者によって、
  - ・ 意外なほどの情熱によって継承されてきた
  - ・ 「遊び」の要素が強い

た。このことを「マイナー・サブシステム」と呼ぶのですが、非常に遊びの要素が強いので、「遊び仕事」という呼び方がいいと思っています。

仕事は、内山節さんが「稼ぎ」と「仕事」という使い分けをしていますけど、まさに「お金を稼ぐ」という形ではなくて、“山の仕事”とかいいますが、そのようなものなんです。例えば米を作っている農家が昔は狩猟もやっていました。今は狩猟が出来る人がいせんから、そのような人はいなくなりましたが、だいたい水鳥などを取っていました、沖縄に行きますと、サシバをよく取って夕食に並べたりするという話を聞きました。漁撈などでは特



に川が重要で、もちろんサケとか鮎もありますが、今は河口でうなぎを取るということはあるでしょうし、このようなことは一般的にやられています。それから山菜やキノコ採りもありますし、他にも水田で鯉を飼ったり、長野の方ではハチツルを取るなど、さなざまな営みがあります。

これらを座標軸を用いてお話したいと思います。私たちが人間として、例えば川に関わっていった時、「ものの次元」と「心の次元」が対極にあると思います。そしてもうひとつ、「人と自然が直接的に関わること」と「自然を前にして、人と人が関係を持つ」ということが挙げられます。左上<第2象限>の端的な例は、捕って食うということになります。それが左下<第3象限>になってくると、社会的に生業・産業システムになっていく。一方で、例えば今のうなぎが取れるとか山菜が取れるといった、何らかの記憶や心の問題に関わってくることは、そこにいる人たちが何らかの形で精神的な共同意識みたいなものが生まれると思います。または直接愛でるとか、畏敬の念を持つということもあります。こういう形の4象限で見ると分かりやすいと思いますが、例えば農業などはここ<左茶色枠>になってくる。もちろん「捕って食う」ということに関係しているのですが、一般的に人間社会の中でも経済システムになっている。でもそれだけではなく、稲を育てるにしても稲に対する何らかの思いを持つようになります。稲に神様が宿るとの話もありますけど、そうした宗教的な、心の問題が出てきます。

宗教的な関係があるということは、その地域で精神的な思いを共にしながら、共同的な意識を持つことだと思います。遊びに対しても、遊びだからと言って右側に偏っているわけではありません。子どもが川に行くとサワガニを捕ることがありますが、それは精神的な意味で非常に重要なのですが、一方では「捕って食う」という経済的な部分もあったわけです。今ではコンピューターゲームなどになってしまいましたから、生き物との関係はなくなりました。「遊び仕事」はこの中間的なもので、人間が生きていくということは、生産活動と遊びという精神活動の連続的な形が行われていると思います。「捕って食べる」ことが「楽しい」と思うのは、体を動かして取って、食べたからだとも言えます。このように体に染み付いた記憶が重要で、里川を考える際、「あの時にあそこで捕ったエビの味はどうだった」というような体に染み付いた記憶を、私たちがどう考えるかということになってくると思います。

ところが現在、日本は精神的なものよりも生産力が重視されている。農業にしても、化学農法は生産力を重視していった結果であり、生業活動を非常に経済的な方に力を入れているからだと思います。逆に遊びでは自然との関係がなくなっていく状況になってきている。当然「捕って食べる」ことはない。このように生業活動と遊びが分離してきて、本来は中間にある「遊び仕事」が段々なくなってきた。「遊び仕事」の現場とは、里川や里山・里海のような、子どもたちが自然と関わって出来る場所です。しかし、産卵のために魚が田んぼまで上がることが出来なくなるような水路になっているように、生き物がいるよりは生産力を上げるということを重視してしまい、その結果として、「遊び仕事」がなくなってしまいました。ですから里川を取り戻すということは、「遊び仕事」を中心にして、遊びや生業を展開し直すことになるのではないかと思います。

## 「利用」の論理と社会構造

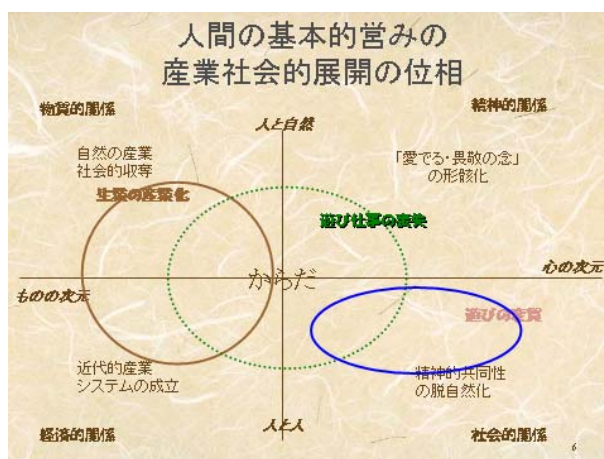
ここで「利用」を集約して考えてみますと、「権利」という話が出てきます。例えば水であれば水利権がある。水を使える権利を持っている人と持っていない人がいる。これが「所有」をもたらしているのであり、ここから水争いが出てくるわけです。基本的に二次的な自然をどう管理するかを考えることで、初めて維持されていく。管理されなければ、それは里山でも里川でもなくなっていく。ですから最近では里川が荒れたり臭くなったりして、どぶ川になってしまう。あるいは里山が荒れ果ててしまっている。これを何とかしなくてはならない。

なぜかと言いますと、二次的な自然は、絶えず人間が関わることによって、攪乱を起こして成立してきていた生態系なのです。現代の生態系管理の考え方でも、二次的な自然を管理する際には、何らかの関与が必要で、そのために管理が必要となります。その利用と権利も含めて、倫理とどう関わるかということが非常に重要になってきます。

管理とは基本的に、利用と不可分の関係になります。例えば「水を利用したい」「水利権がある」となったときに、水利権があるから使うということだけではなく、そこに水を引いてくる水路をきちんと管理しなくてはならない。ドブさらいもしなくてはならないし、そこで草刈もしなくてはならない。そういうことをしなければ水利権があっても、水を利用したということにはならないのです。ですから管理と利用は非常に不可分な形で存在しているのです。

センターの方が「守水」という話を出されたのは、この辺ことではないでしょうか。

もうひとつは、川の場合は氾濫などの災害の問題があります。自然は利用する対象ではあるけれども、荒ぶる自然なわけで、どういう風になるかが分からない。そのように災害や洪水が起きる可能性がある中で、人間が何とか上手く宥めながら利用してきたという経緯があるわけです。ですから近代の河川工学は、



力づくで災害を押しとめようとしてきたわけです。

江戸時代ぐらいまでは利用と管理を地域でやってきましたが、近代になって、力づくで川を治める時代になって、誰が管理するかという問題が発生してきました。ですから次は「利用の主体」と「管理の主体」という話になります。今までは共有地だったから、みんなで管理をして、みんなで共同作業をやっていた。ところが管理主体が行政になり、国土交通省が「これからは私たちが全部責任を持ってやっていきますので、国民の皆様ご安心下さい」という状況になってしまいました。

つまり地域の人たちは管理しなくても済むようになってしまった。これは非常に楽になったような感じはしますが、実際には管理主体が行政に移ることによって、地域の人々は消費者側になってしまった。これが里川がなくなってきたことに関係があるのではないかと思います。

島谷さんの話の中にも「美しいと思うか」ということがありましたが、「美しい」と思うかどうかは色々な考え方があってと思います。自然の仕組みの中で、自然の論理の中で動いているものは「美しい」と思うのですが、里山や里川が放置されて、荒れた感じになったのは、「自然だからいい」とは思えません。

それから管理することには、情報を共有したり共同作業を行うという側面があります。ところが現代では共同作業をすることが殆どなくなってきた。自然に対して何もなくていい状況になってきた。そこをどう考えるかという問題があると思います。

そこで生態系の管理の話を簡単にしたいと思います。現代の生態系管理は、「どう自然がいいのか」という仮説を立てて、言論的な管理をしていきます。この時に、現代では「多様な主体が参加しなくてはならない」とか「合意形成が必要になる」という問題が出てきます。住民が主体になる合意形成を進めるための自然環境的なモニタリングが行われていますが、これからは人文社会的なモニタリングも必要になってきます。今までは行政に任せていたものに、いろいろな参画が必要になる時代になってきたのです。

もう少し自然との関係の話を付け加えておきますと、人間が色々な形で関わっていくときに、自然に対して、利用のルールとか社会組織をつくりあげていきます。そこで重要なのが、何らかの社会的共同性が確保されることです。精神的な共同性があって、望ましい自然・綺麗な自然という価値が共有されていた。それをもう一度、どうやって復元するかということが問題になってくるのです。

## 情報共有と身体知

繰り返しになりますが、管理の作業は情報共有の意味を持ちます。情報共有とは、その自然を知ることになり、さらにそういうことをやりながら「どう自然がいいのか」「どう自然の中で育まれているか」という、人間にとって一種の風土みたいなものを認識していくものです。それをただ単に、何も手を加えないでやるわけではなく、共同作業を通じてやっている。みんなでいっしょにやることによって、身体的な知

## 情報共有と身体知

- 「管理」の作業は、地域の自然の情報の共有の意味を持つ
- 共同作業は、社会的共同性だけでなく、身体知を通じた精神的共同性をもたらす
  - 「みんなで一緒にやること」
  - 土地に根ざした共同体、身体知を共有する新しい共同体のようなものの意味
- 関心を共有し、情報を共有することが「倫理」を生み出す
  - 人と人（関係性）にある／から生み出される「倫理」
- 「身体知」は遊び仕事や遊びに育まれる
  - 「川ガキ」の重要性

が共有されます。水を守る「守水」もその一種で、里川はそういうところで成り立ってきて、そこから倫理が生まれるのではないかと考えます。

倫理は人と人との間から生み出されるもので、「自然に対してこうしなければならない」というのが最初からあるわけではなく、暮らしていく中で、自然との付き合い方を見極めていく。そのためにはしっかり情報を共有することが必要になってきます。今となっては管理というものが存在しないので分かりにくいのですが、昔はみんな共同で管理していて、みんなに関心を持って、さらに言えば、そこで遊んでいたことによって、きれいな水を共有できたと思います。そういうところから倫理は生まれるのではないかと。特にこの身体知というのは「遊び仕事」とか「遊び」ということにおいて重要になります。最近では“川ガキの復活”とか言われていますが、「川で遊ぶ」という意味は、身体知をもう一度取り戻しながら、川と関わることで自然を復元しようというものだと思います。

この時に技術の倫理とは、水との係わり合いを取り戻す方法を考えることであり、技術のあり方を考えていくことだと思います。そこには「遊び」とか身体知が非常に重要になってくるのではないかと。「遊びの空間」として、あるいは「管理の場」として、みんなが関わっていれば、水の変化に対して敏感に反応できる。逆にそういうものがなくなってしまったから鈍感でいられる。汚くなくても平気でいられる。ですから水の綺麗さは「遊び」や「管理」と非常に関係がある。ですから水がきれいだというときには科学的に測って分かるものもありますが、究極的には、そこに暮らしている人が「飲んで大丈夫だと思うか思わないか」となります。大丈夫だと思うか否かは、絶えずそこに関心を持って遊んだり管理をしていなければ、分からないことだと思います。私たちは倫理と言う時に、そういうことを考えたりしなくてはならないのだろうか。結局、管理主体が行政に移ってしまったことで、私たちが取り戻したものをもう一度取り戻すということが、里川を私たちのものにするということですし、そこでの子どもの遊びとか遊び仕事、あるいは管理ということを位置づけ直すことではないでしょうか。

最後にローカルナレッジと申しまして、簡単に言えば生活知ですが、科学知ではないような、生活で人々に根ざした知があると思います。例えば歴史的に蓄積されたものがあると思いますし、あるいは地域独特のものもあります。さらには専門家でなくても、その地域にいる素人による、何らかの意味を持った知があります。

今までは普遍性を目指してきたけれども、これからは地域に重点を置かなくてはならないのではないのでしょうか。それは空間的なものを大事する考え方で、多自然川づくりに通じる部分があると思います。また文化や歴史を重視して生活知などの時間的な蓄積を取り戻したり、そこに人々が参加する意味を見出す。最後に不完全性に意味を見出すことです。今までは技術で完全にモノを創ってしまう。つくるものが技術だといわれていたんですが、これは自然の中で崩れていく、変わっていく。技術で全部をつくりこむのではなく、自然の中でつくっていく、人間がそこに参加してつくっていくと言うことが大切なのではないかと。そういう技術のあり方とか、自然に対するかかわり方を変えることによって里川が甦ったり、そこで関わったりするものがあるのではないかと考えます。